

主題 家庭教育を支援する社会教育主事による派遣事業の展開

副主題 自主的・自発的な活動をサポートする社会教育主事のコーディネート活動の具体化を通して

北 筑 後 教 育 事 務 所
社会教育主事 矢野 沙織

こんな手立てによって…

家庭教育に関する「ひと」「もの」「こと」をコーディネートする活動を、自主的・自発的活動の過程に位置付け、社会教育主事の役割を明確にすることを考えた。

こんな成果があった！

家庭教育支援チームの意識、構成員のスキルが高まり、地域に密着した家庭教育を支援する派遣事業を展開することができた。

1 考えた

本研究では、家庭教育支援チーム派遣事業において各チームの支援活動を社会教育主事がサポートすることで、将来的にはチームの構成員を中心に、地域に密着し、地域の住民を巻き込みながら家庭教育支援活動を展開することができると考え、本主題を設定した。

そこで、各家庭教育支援チームの支援活動に、「ひと（構成員）」「もの（依頼内容・依頼施設）」「こと（活動内容）」を社会教育主事がコーディネートすることで、支援活動の内容や方法を明確にし、チームの構成員が家庭教育支援活動により意欲をもって取り組むことができるようにしたいと考えた。

2 やって見た

家庭教育支援チームの自主的・自発的な活動をサポートする社会教育主事のコーディネート活動の有効性を、実践1－a 保育園保護者学習会への派遣活動、実践2－b 地区親子家庭教育講座への派遣活動、実践3－c 地区母親サークル食育学習会の実践を通して検証した。

実践1、実践2では、「家庭教育を支援するネットワークの構築を図る工夫」「家庭教育を支援する構成員のスキルアップを促す工夫」「家庭教育を支援する活動をつなぐ振り返りの工夫」の有効性を検証することができた。

実践3では、社会教育主事のコーディネート活動のねらいを変更し検証を行うことで、「参加者同士をつなぐ」というネットワークを構築する新たな視点を見いだすことができた。

3 成果があった！

家庭教育支援チーム派遣を展開する上での社会教育主事の役割の具体化を図ることができた。

- ・家庭教育に関するネットワークの構築を図ることで、情報の収集、分析、提供ができること。
- ・チームの構成員のスキルアップを図ることで、家庭教育に関する人材育成ができること。
- ・継続的な活動へつなぐ振り返りを行うことで、支援チームの組織化援助ができること。

主題 家庭教育を支援する社会教育主事による派遣事業の展開

副主題 自主的・自発的な活動をサポートする社会教育主事のコーディネート活動の具体化を通して

1	主題設定の理由	3
	(1) 教育の動向から	3
	(2) 地域・保護者の家庭教育、子育ての実態から	3
	(3) 社会教育主事としての職務と役割から	4
2	主題の意味	5
	(1) 「家庭教育を支援する」とは	5
	(2) 「家庭教育を支援する社会教育主事による派遣事業の展開」とは	6
	(3) 「自主的・自発的活動」とは	7
	(4) 「自主的・自発的な活動をサポートする社会教育主事のコーディネート活動」とは	7
3	研究の目標	9
4	研究の仮説	9
	(1) 研究仮説の内容	9
	(2) 研究仮説の検証の方途	9
5	研究の構想	9
	(1) 家庭教育を支援するネットワークの構築を図る工夫	9
	(2) 家庭教育を支援する構成員のスキルアップを促す工夫	10
	(3) 家庭教育を支援する活動をつなぐ振り返りの工夫	11
6	研究の実際	12
	(1) 実践Ⅰ (a 保育園保護者学習会への派遣活動)	12
	(2) 実践Ⅱ (b 地区親子家庭教育講座への派遣活動)	16
	(3) 実践Ⅲ (c 地区母親サークルへの派遣活動)	21
7	全体考察	24
8	成果と課題	25
	<参考文献>	25

主題 家庭教育を支援する社会教育主事による派遣事業の展開

副主題 自主的・自発的な活動をサポートする社会教育主事のコーディネート活動の具体化を通して

北 筑 後 教 育 事 務 所
社会教育主事 矢野 沙織

1 主題設定の理由

(1) 教育の動向から

「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」（平成 27 年 12 月 中央教育審議会）には、学校と地域の連携・協働について以下のように示されている。

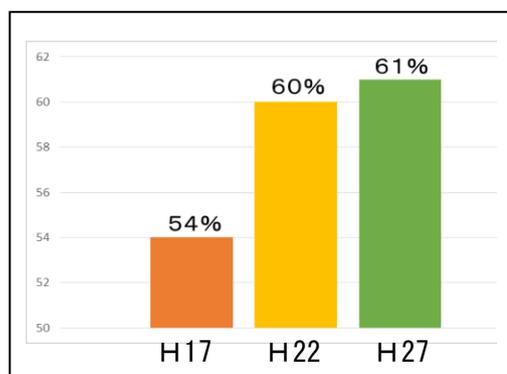
未来を創り出す子供たちの成長のために、学校のみならず、地域住民や保護者等も含め、国民一人一人が教育の当事者となり、社会総掛かりでの教育の実現を図るということであり、そのことを通じ、新たな地域社会を創り出し、生涯学習の実現を果たしていくこと。

つまり、学校と地域が一体となって子供の教育に関わり、新たな地域社会を創り出すことが求められている。また、学校と地域の連携・協働の必要性の一つに、「社会全体で、子供たちを守り、安心して子育てできる環境を整備する観点」が示されており、保護者が安心して子育てや家庭教育を行うことができる地域環境の整備も求められている。

以上のことから、社会教育においても、「地域にできることを考え、地域住民によって保護者を支え、一緒に子供を育てていくこと」を実現していかなければならないのである。本研究では、地域で組織した家庭教育支援チームが、家庭教育を支援する内容と方法を考え、実践していこうとする自主的・自発的な活動を充実させる上でも意義深いと考える。

(2) 地域・保護者の家庭教育、子育ての実態から

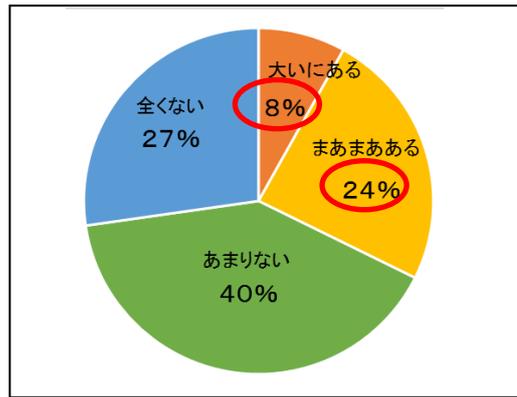
家庭では、子供が社会を生き抜く力を持つことができるよう、様々な教育資源の情報収集や活用を図るなど、各家庭でできることを実践してきているが、近年、この家庭の教育力の低下が指摘をされてきている。その原因として考えられるのが、核家族やひとり親家庭の増加等の家族形態の変容や地域とのつながりの希薄化を背景に、子育てや家庭教育への不安を抱える保護者の増加である。資料 1 は、子育てに不安や悩みがあると回答した女性保護者の経年変化（「平成 27 年度幼児（3・4・5 歳児）をもつ保護者の養育態度・意識の実態に関する調査（福岡県立社会教育総合センター平成 28 年 3 月）」を示したものである。



【資料 1 子育てに不安や悩みがあると回答した女性保護者の割合】

この資料からも、子育てに関する悩みや不安を抱えている保護者が年々増加していることが分かる。

また、資料2は「一人で子育てをしていると思うか」（「平成27年度幼児（3・4・5歳児）をもつ保護者の養育態度・意識の実態に関する調査（福岡県立社会教育総合センター平成28年3月）の質問に女性保護者が回答した結果である。この資料の子育てに孤立感を感じている保護者が32%いることから、保護者の身近に子育てについて相談する相手が少ないことが考えられる。



【資料2 子育てに孤立を感じている女性保護者の割合】

これらのことから、全ての保護者が地域で安心して子育て、家庭教育を行うことができるように、子育て、家庭教育に関する知識を学んだり、悩みを相談したりすることができる機会や場所を提供することが本派遣事業のねらいである。そこで、本派遣事業を展開させることは、保護者の家庭の教育力を向上させ、子供たちのよりよい成長につながると考える。

(3) 社会教育主事としての職務と役割から

〈社会教育法第九条の三〉

社会教育主事は、社会教育を行う者に専門的技術的な助言と指導を与える。ただし、命令及び監督をしてはならない。

社会教育主事の職務は、専門的技術的な「助言と指導」を与える『間接的な支援』なのである。つまり、本派遣事業に置き換えると、家庭教育支援を行うチームの構成員が、自主的・自発的な活動を行うための環境や体制づくり等の支援を行うことが社会教育主事の職務となるのである。

この社会教育主事の職務を遂行するための役割として、栃木県教育委員会事務局生涯学習課課長補佐・国立教育政策研究所フェローの井上昌幸氏は次の6つに分類をしている。

- ・住民の自主的・自発的な学習(活動)を支援・援助していく主体的学習(活動)の促進
- ・社会教育に関する計画・事業等の企画立案
- ・立案した事業が住民にとって真に必要なものとなるための情報収集・分析・提供
- ・住民の自主的な学習や活動を促進し、継続的な学習・活動へと誘導する組織化援助
- ・実施する活動において関係する地域の人材等の連携のための連絡調整
- ・学習機会や地域活動を通じた人材発掘や人材育成

これらの6つは、本研究での社会教育主事のコーディネート活動にも当てはまると考えるが、それぞれの役割をいつ、どこで、どのように行うのかといった具体的な内容や方法は明らかにすることができていない。そこで、本研究「家庭教育を支援する派遣事業の展開」において、重視すべき社会教育主事の役割、内容、方法を明らかにし、家庭教育支援チームの構成員が意欲的に、地域に密着した支援活動に取り組むことができるようにしたいと考え、本主題を設定した。

2 主題の意味

(1) 「家庭教育を支援する」とは

全ての保護者が安心して子育てを楽しむことができるように、家庭教育に携わる地域の多様な人材で構成されたチームの構成員が連携して、保護者のニーズに対応した情報を提供したり、実践の具体化を示唆したりすることである。

子供が健やかに育つためには、保護者が笑顔で、喜びや生きがいを感じながら安心して子育てができる環境を整えることが必要である。

このことから、本研究では環境の中でも特に“人的環境”を整え、保護者を支えるチームを地域で組織し、家庭教育支援活動を行うことを重視する。そこで、具体的なチームの構成員と役割及び特性については以下に示すように考える（表1）。

【表1 チームの主な構成員と役割】

構 成 員	役 割
コーディネーター	チーム内の連絡・調整を行う
社会教育主事	家庭教育、子育てに関する情報提供、講義等を行う
家庭教育講師、音楽療法士、言語聴覚士、 大学講師、絵本コンシェルジュ、保健師、 保育士、読み聞かせボランティア 等	家庭教育や子供の発達、保育、保健の専門家として 子育てや親子のコミュニケーション等についての 講義や保育、悩み相談を行う
子育てマイスター 子ども一時預かりボランティア	子育て等についての悩み相談や保育補助等を行う

↓

【チームの特性】

- ・多様性…家庭教育に関する様々な視点からの専門的な知識や経験をもっている
- ・親密性…保護者に親しみ深く、保護者の気持ちに寄り添うことができる
- ・機動性…保護者のニーズに応え、効果的に活動することができる

表1に示すチームが機能することにより、以下に示すような保護者のニーズに対応した取組を展開できると考える。家庭教育支援活動として考えられる具体的なチームの取組を以下に示す（資料3）。

- ・講演会の定期的な開催
- ・相談事業の機能化
- ・親子を対象とした体験活動



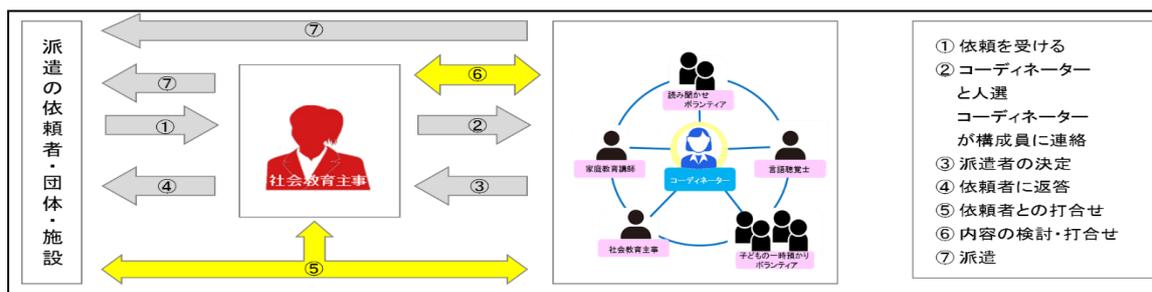
【資料3 具体的なチームの家庭教育支援活動の具体例（親子を対象とした体験活動）】

このような家庭教育支援を各地域の実態に応じて展開することが、保護者が地域をより身近に感じ、安心して子育てができることにつながると考える。

(2) 「家庭教育を支援する社会教育主事による派遣事業の展開」とは

依頼施設の思いや願いを把握し、チームのコーディネーターと依頼内容に応じた構成員を選んだり、構成員が依頼内容に応じて自分のスキルを派遣先で発揮することができるようにしたりして、依頼施設にチームの構成員を派遣することである。

チーム派遣の依頼者は、保育園、小学校、子育て支援センター、母親サークルなど様々であり、依頼者によって思いや願いも多種多様である。そこで、派遣依頼者の依頼内容を具体化するために、社会教育主事がチームのコーディネーターと相談し、依頼内容に合った構成員を選び、依頼先へ構成員を派遣して手厚い支援を充実させる（図1）。



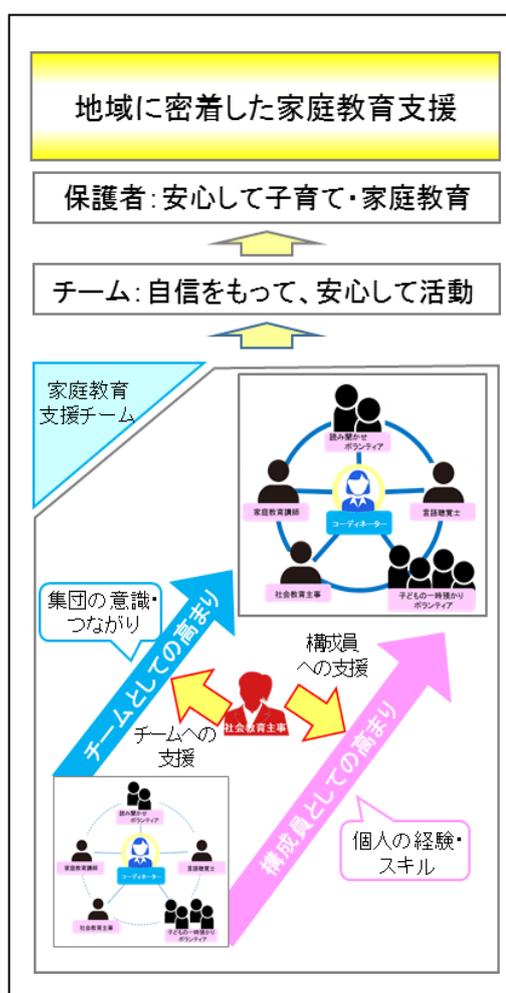
【図1 チームの派遣までのプロセス】

派遣先にて支援活動を行うには、チームに属する全ての構成員が安心して依頼に対応することが必要である。しかし、地域によっては講話経験のある構成員や人前で話す経験の少ない構成員などチームの構成は様々である。また、構成員とコーディネーターとのつながりはあるが、チームの構成員同士のつながりは希薄である。

そこで、本研究においては、上記図1における「⑤依頼者との打合せ」「⑥社会教育主事とチーム構成員との内容の検討・打合せ」のプロセスを重視し、構成員が自信をもって、安心して家庭教育支援活動を行うことができるようにする。

また、チームを構成している構成員のそれぞれの経験やスキルが家庭教育支援活動に生かせるよう、地域の実態に応じたチームの活動を支援するようにする。そうすることで、家庭教育に関する意識の広がり、高まりが見られ、「全ての保護者が安心して子育てできる環境をチームの構成員と共につくりたい」という思いの具体化ができるようになる。これが、地域の実態に応じ、地域に密着した家庭教育支援につながっていくと考える（図2）。

そこで構成員の経験やスキル、チームの意識やつながりを高めるために、社会教育主事の役割の内容と方法を明らかにする必要があると考える。



【図2 支援チームの目指す姿】

(3) 「自主的・自発的活動」とは

家庭教育支援活動を継続的に改善・向上させるために、「計画」「実践」「振り返り」の一連のプロセスをつくり出し、そのプロセスに沿って活動を行うことで、家庭教育支援の内容と方法を明らかにすることである。

本研究では、チームの構成員を派遣することで家庭教育を支援していくが、最終的には地域の課題、実態に応じて、地域で支援を行い、地域で保護者、子供を守り育て、安心して子育て、家庭教育を行うことができる環境を整えることが求められている。しかし、保護者の力になりたいが、どんな支援（内容）を、どのように（方法）したらいいのかわからないというのが地域の現状である。

そこで、支援活動のプロセスを明らかにし、そのプロセスの中で支援活動の内容と方法の具体化、活動の充実を図り、家庭教育支援の改善、向上を図ることが必要だと考えた。支援活動のプロセスの展開に当たっては、チームの構成員が「不安感」をもたないように、以下に示すプロセスの内容を充実させることが大切だと考える（表2）。

【表2 自主的・自発的活動のプロセス及び各段階の目的、内容、方法】

	計 画	実 施	振 り 返 り
目 的	支援活動の全体のイメージをもつため	依頼内容を具現化し、支援活動を行うため	次回の支援活動へのよいイメージをもつため
内 容	・目指す保護者の姿の共通理解 ・支援の内容、方法の検討と具体化	・支援活動の準備 ・依頼内容の実行	・「よかったこと」「問題だったこと」「次やってみたいこと」の3観点から活動を見つめ直す
方 法	・保護者の実態把握 ・依頼内容の理解 ・活動内容の提案	・派遣対応者との打合せ ・活動内容の検討、役割分担 ・支援活動中の補助	・派遣対応者からの振り返り ・社会教育主事からの助言

ここで大事になるのは、この自主的・自発的活動のプロセスと目的、内容、方法を構成員だけではなく、社会教育主事、コーディネーターも共通理解をして活動することである。そうすることで、支援活動に関わる全員が同じ方向を向いて活動を展開することができ、集団としてのつながりも高まると考える。

(4) 「自主的・自発的活動をサポートする社会教育主事のコーディネート活動」とは

社会教育主事が支援活動に関係するひと（構成員）、もの（依頼内容、依頼施設）、こと（活動内容）をつなぐ役割を果たし、家庭教育支援チームの構成員が意欲的に支援活動を行うことができるようにすることである。

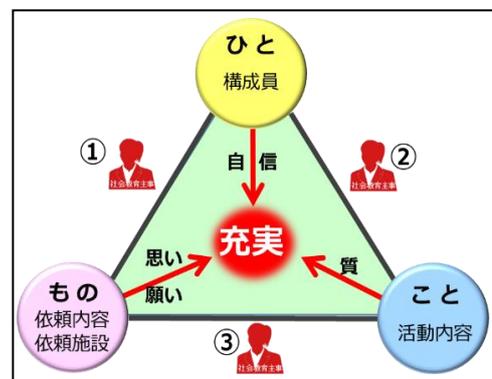
構成員が支援活動を行う際に大事なことは、保護者の実態を知ることである。保護者の家庭教育に関する意識や家庭環境等を把握した上で活動を展開しなければ、保護者のニーズに対応することにはつながらないと考える。

そこで、構成員が保護者の実態を把握する機会、つまり依頼主との打合せの場を設定する必要がある。また、保護者の実態を活動内容に生かせるように、活動内容を検討する場、実施した支援活動を振り返る場も必要である。以上の場を設定し、ひと・もの・ことを相互につなげる、つまりコーディネートすることが支援活動を展開する上で重要となる。

以下に示すのは、ひと・もの・ことを社会教育主事がコーディネートする手順である。

- 【手順1】 ひと・ものをつなぐために、打合せの場を設定し、保護者の実態、依頼主の思いや願いを把握し、構成員が支援活動のイメージをもつことができるようにする。
- 【手順2】 ひと・ことをつなぐために、依頼内容を具体化する場を設定し、支援内容、方法の助言を行い、構成員が支援活動を実施することができるようにする。
- 【手順3】 もの・ことをつなぐために、活動内容を振り返る場を設定し、活動内容や保護者の姿からの助言を行い、次回の支援活動に生かすことができるようにする。

上記の手順1を計画段階、手順2を実施段階、手順3を振り返り段階に位置付けることで、ひと（構成員）は、すべきことが明確になり、自信をもって、支援活動に取り組むことができる。この手順を踏むことで、こと（活動内容）も保護者の実態、依頼内容を含んだものとなり、内容の質の向上が期待される。もの（依頼内容、依頼施設）は思いや願いが具体化されて参加者に届けられることで、充実した支援活動を展開できると考える（図3）。



【図3 社会教育主事のコーディネート活動】

また、この手順はP4に示した社会教育主事の役割の中の三つにあてはまると考える。以下に示すのが、コーディネートの手順と対応する社会教育主事の役割であると考えられる。

- 【手順1】 ひと・ものをつなぐ・・・情報収集・分析・提供
- 【手順2】 ひと・ことをつなぐ・・・人材育成
- 【手順3】 もの・ことをつなぐ・・・組織化援助

以上のように、ひと・もの・ことの三つを社会教育主事がコーディネートする、つまりつなぐ役割を果たすことで、構成員が安心して積極的に支援活動を行うことにつながると考える。資料4は、実践1における自主的・自発的活動をサポートする社会教育主事のコーディネート活動の具体例を示したものである。

《手順1》	《手順2》	《手順3》
<p>～ ひと・ものをつなぐ ～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育園との打合せを設定 ・ 保護者の実態、園の願いの把握 ・ 支援内容の提案 	<p>～ ひと・ことをつなぐ ～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 構成員との打合せを設定 ・ 支援内容の検討、役割分担 ・ 支援活動中の補助 	<p>～ もの・ことをつなぐ ～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 構成員との振り返りを設定 ・ 構成員からの振り返り ・ 社会教育主事からの助言
<p>親子のコミュニケーションが不足しているのであれば、演習を取り入れた研修会にしてみてもどうでしょう</p>	<p>先日の研修会で学んだ紐を使った親子のやり取りの感覚や構成員の得意なわらべ歌等も取り入れてみたらどうでしょう</p>	<p>紐を使ったの演習は、研修会の場も和み、演習中の保護者の反応もよかったですね。今後も導入に活用できそうですね。</p>

【資料4 自主的・自発的活動をサポートするコーディネート活動の具体例 (a 保育園からの依頼)】

3 研究の目標

<p>家庭教育支援チームの自主的・自発的活動をサポートする社会教育主事のコーディネート活動の在り方を解明し、家庭教育を支援する社会教育主事の派遣事業の展開を明らかにする。</p>
<p>以上の研究の目標を達成するために、重視する社会教育主事の役割を、「情報収集・分析・提供」「人材育成」「組織化援助」の三つと捉え、以下の視点に位置付けることで、家庭教育支援チーム派遣活動の積み上げを図る。</p> <p>視点1 家庭教育を支援するネットワークの構築を図る工夫【情報収集・分析・提供】</p> <p>視点2 家庭教育を支援する構成員のスキルアップを促す工夫【人材育成】</p> <p>視点3 家庭教育を支援する活動を継続的な活動へとつなぐ振り返りの工夫【組織化援助】</p>

4 研究の仮説

(1) 研究仮説の内容

<p>社会教育主事が家庭教育を支援する派遣事業において、計画段階の前に人材ネットワークの構築を図る工夫や構成員のスキルアップを促す工夫をしたり、振り返りの段階に支援活動を継続的な活動へとつなぐ振り返りの工夫をしたりすれば、家庭教育支援チームとしての意識の高まりや構成員としてのスキルの高まりが見られ、地域に密着した家庭教育支援チームの派遣事業を展開することができるであろう。</p>

(2) 研究仮説の検証の方途

自主的・自発的な活動の計画、実施、振り返りの段階において、社会教育主事によるコーディネート活動（手順1、手順2、手順3）が有効であったのかを、研究の目標に示した3つの視点から分析する。その視点と方法を表3に示す。アンケートは4件法（「4：よくできた」「3：できた」「2：あまりできなかった」「1：できなかった」）で回答してもらう。また、目標値を3とし、成果と課題を見取るようにする。

【表3 仮説検証の視点と方途】

視 点		実 証 方 法
視点1	○ 家庭教育を支援するネットワークの構築を図る工夫により、派遣事業を展開することにつながったのか	○ 打合せ後の構成員へのアンケート ・ 支援活動のイメージをもつことができたか ・ 自分のスキルを生かすことができると思ったか
視点2	○ 構成員のスキルアップを促す工夫が、派遣事業を展開することにつながったのか	○ 派遣活動時の保護者の反応 ○ 支援活動後の保護者へのアンケート ○ 支援活動後の構成員へのアンケート ・ 依頼内容に応えることができたか
視点3	○ 支援活動をつなぐ振り返りの工夫が、派遣活動を展開することにつながったのか	○ 支援活動後の構成員へのアンケート ・ 自分のスキルを生かすことができたか ・ 今回の課題を克服したいと思ったか

5 研究の構想

(1) 家庭教育を支援するネットワークの構築を図る工夫（視点1：情報収集・分析・提供）

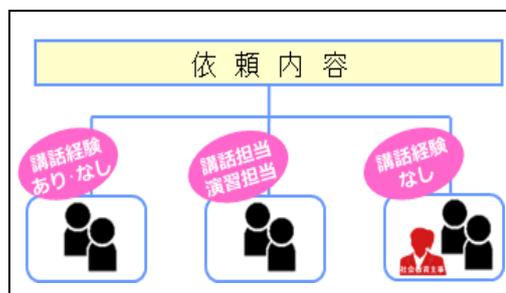
依頼内容にあった最適な構成員を選ぶためには、家庭教育に携わる方々の情報や家庭教育関係施設とのネットワークは必須である。そこで、以下の点からネットワークの構築を図り、

情報の収集や分析、提供を行うようにする。このことは、各地域における家庭教育支援チームの自主的・自活的支援活動の計画づくりに有効に機能すると考える。

○ 市町村家庭教育関係部局との連携

チームのコーディネーターに市町村家庭教育関係部局の職員を配置してもらうようにする。そうすることで、地域の実態や保護者のニーズ、情報を直接知ることができ、地域の実態に応じた支援活動の内容を構想したり、依頼内容に応じた最適な人材を選定して派遣したりすることができるようになる。

また、派遣時の構成員の選定においても、構成員の講話や演習の講師歴が様々なため、構成員の情報を把握し、派遣する構成員の組み合わせを工夫することが必要となる（図4）。この役割を、地域や構成員を理解している市町村家庭教育関係部局職員が担うことで、より地域のニーズに応じた活動が可能になると考える。



【図4 派遣するメンバー構成の工夫例】

○ 家庭教育に関する資料の作成

派遣依頼の多い分野に関しては、社会教育主事が資料（資料5）を作成し、構成員に提供し、支援活動に活用することができるようにする。資料をチームで共有する場を設けることで、チーム間のネットワークができ、互いに支え合いながら支援活動を行うことができると思う。

1 早寝・早起き・朝ごはん		
◆ 早寝（睡眠）のポイント ◆		
眠る時間帯 ● 8時～10時 ※どんなに遅くても10時！ ● 毎日同じ時間に	眠る時間(量) ● 9時間以上 ● 10時～2時が睡眠のゴールデンタイム	眠る環境 ● 暗い環境で ※子どもの心が落ち着くように
寝る前の刺激を減らし、寝つきを大切に！		

【資料5 家庭教育に関する資料の一部】

(2) 家庭教育を支援する構成員のスキルアップを促す工夫（視点2：人材育成）

地域によって家庭教育に関する課題やニーズは異なり、派遣活動に求められることも違って来る。そこで、依頼施設の要望にチームで応えることができるように、各チームで定例会を実施し、構成員のスキルアップを図るようにする。定例会で実施することは、チームの実態に応じて以下の内容を行うようする。

・ 構成員による学習会

チームには、家庭教育に関する専門知識をもち、個人で活動を展開されている方も多い。そこで、定例会に参加した構成員を対象に、チームの構成員が講師となり、自分の専門分野の学習会を行うようにする。そうすることで、学習会で得た学びを、自分の支援活動に生かすことができるようになると思う。

・ 支援内容の検討

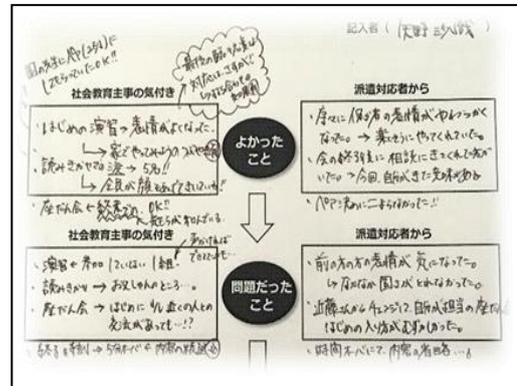
依頼内容によっては、多数の構成員で依頼に対応していくことになる。そこで、定例会時にチームの構成員で意見を出し合い、支援活動の具体化を図るようにする。チームの構成員同士が意見を出し合うことで、支援活動に関する新たな知識や支援方法を見いだすことができ、構成員のスキルアップにもつながると考える。

(3) 家庭教育を支援する活動を継続的な活動へとつなぐ振り返りの工夫（視点3：組織化援助）

支援活動を、よりよい支援活動にするには、一連の活動の振り返りが必要となる。そこで、活動を見つめ直し、次の支援活動にやる気をもって取り組むことができるよう、以下の点を重視し、振り返りを行うようにする。

○ 振り返りシートの作成、活用

振り返りの段階に示した三つの観点、「よかったこと」「問題だったこと」「次やってみたいこと」を可視化し、次回からの類似した依頼に誰でも対応することができるように、振り返りシートに記録を残すようにする（資料6）。また、支援活動中の構成員や参加者の様子を社会教育主事が記録をすることで、助言の根拠としたり、他の支援活動の参考にしたりすることができる。

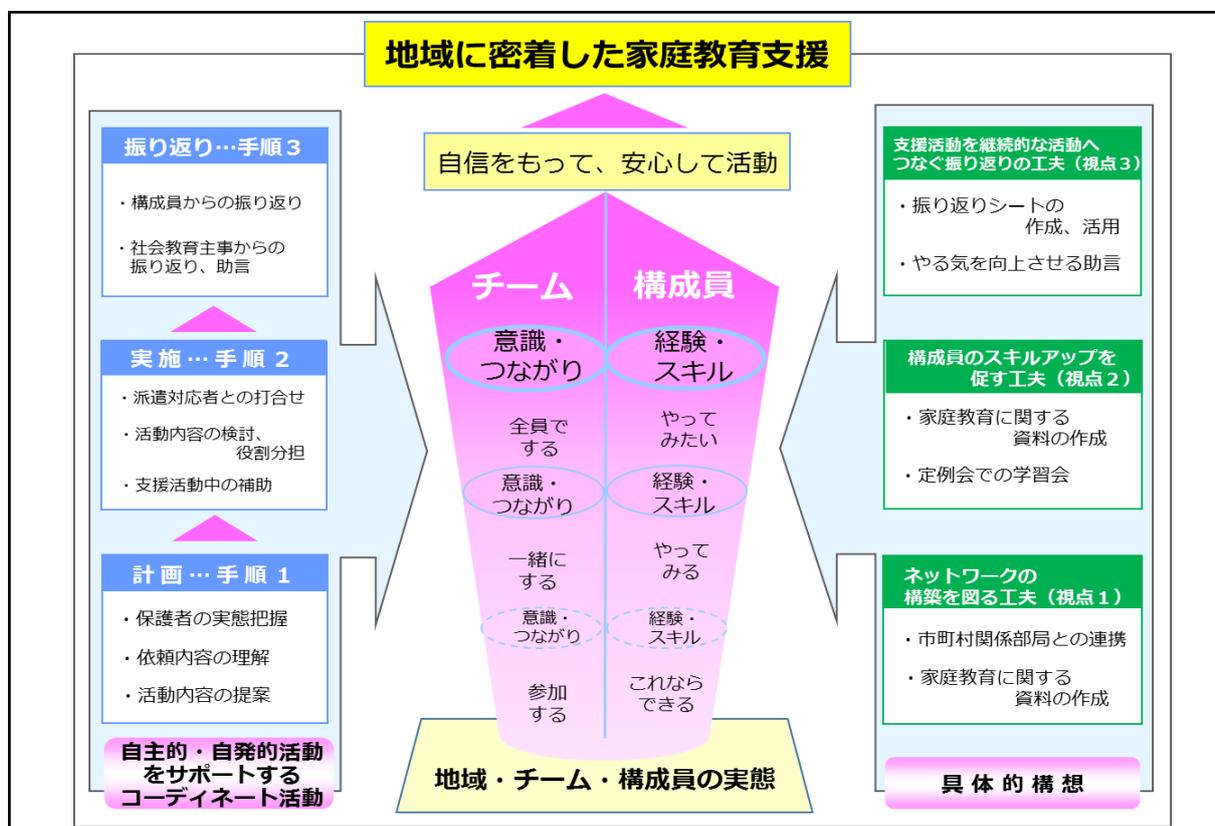


【資料6 振り返りシートの一部】

○ 構成員のやる気を向上させる社会教育主事による助言

十分な計画、準備はしたが、支援活動後ほどの構成員も活動内容、保護者の反応等自分の活動がどうだったのか不安な気持ちでいっぱいである。そこで、以下の点から助言を行い、自信をもって次回の支援活動に臨んでもらうようにする。

- ・よかった点（7割）…派遣準備、活動内容、保護者の反応等からの価値付け
- ・改善点（3割）…振り返りシートから出された「問題だったこと」の具体的な改善案から



【図5 研究構想図】

6 研究の実際

(1) 実践1

a 保育園保護者学習会への派遣活動（A地域の家庭教育支援チーム）

① A地域の家庭教育支援チームの構成員について

A地域は、家庭教育に関する支援活動（家庭教育講座等）が以前から活発に行われており、家庭教育を支援する人材も多い。そのため、構成員も多種多様な職種から構成することができており、独自で講演活動等をされている方も所属している。以下に示しているのは、A地域の家庭教育支援チームの構成員の職種である。

- ・家庭教育講師
- ・「抱っこ法」講師
- ・音楽療法士
- ・社会教育委員
- ・大学講師（元看護師）
- ・児童デイケア施設職員
- ・元小学校長
- ・コーディネーター（A市家庭教育担当者）

② A地域の家庭教育支援チームの定例会での学習会について（研究の構想：視点2）

A地域の家庭教育支援チームは、3か月に1回程度定例会を実施し、構成員が行った支援活動の報告やA地域の家庭教育支援チームの構成員を講師として、支援活動に生かせるよう学習会を行った。資料7は、今までに行った学習会の内容である。

【「抱っこ法」講師による講話】

～保護者を支援するための傾聴講座～

- ・支援者としての在り方
- ・きき方の違い（聞く・聴く・訊く）
- ・傾聴の三つのポイント（共感・受容・信頼）
- ・親子のやりとりを実感できる演習

【家庭教育講師による講話】

～子供に学ぶ家庭教育～

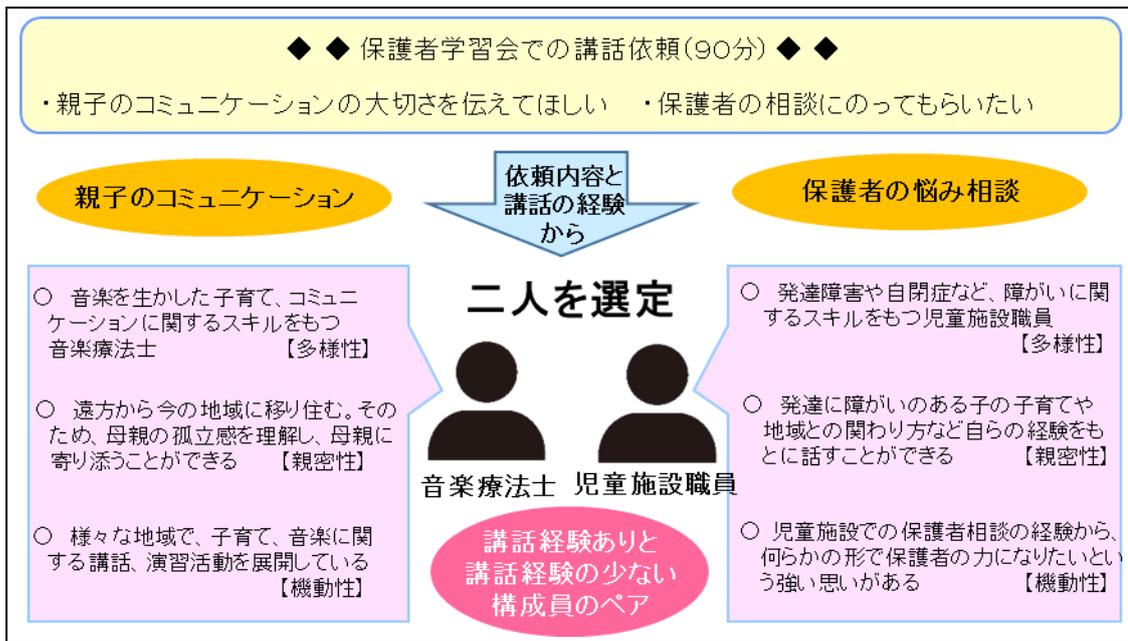
- ・子供が身に付ける三つの能力
知的能力…学校教育 意欲能力…社会教育
情的能力…家庭教育
- ・親子のコミュニケーションで大事にすること
“やさしいまなざし、やさしい語りかけ、温かい肌のぬくもり”



【資料7 A地域の家庭教育支援チーム内での学習会の様子】

③ 構成員の選定について（研究の構想：視点1）

a 保育園からの依頼書をもとに、A地域の家庭教育支援チームコーディネーターと相談し、依頼内容と構成員の講話等の経験から派遣対応者の人選を行った。コーディネーターの構成員に関する情報から、今回は講話経験が豊富で、音楽を生かした親子のコミュニケーションのスキルをもつ音楽療法士と講話経験は少ないが多様な保護者から相談を受けている児童デイケアの職員の二人に派遣活動を依頼した（資料8）。



【資料8 a 保育園への派遣対応者の人選】

④ 実践1の社会教育主事のコーディネートの立場について

自主的・自発的な活動になるよう、手順1→手順2→手順3に沿ってコーディネートを行っていくが、今回の派遣対応者の実態（保育園での支援活動は初めて、講話経験の少ない構成員を含む）から、手順1、手順2に重点を置きコーディネート活動を行う。

⑤ 実践1のコーディネート活動の実際について

ア a 保育園の保護者を対象とした学習会の計画

【手順1】・・・派遣対応者とともに打合せに参加し、a 保育園の担当者から、保（ひと・ものをつなぐ）育園の保護者の実態、保育園の願いを聞き、支援内容の提案を行い、当日の支援活動のイメージをもつことができるようにする。

保護者のニーズ、a 保育園の願いや思いに応えるために、まずはa 保育園の担当者から保護者の実態の聞き取りを行った（資料9）。聞き取りから明らかになった保護者の実態は以下の通りである。

- ・多忙な保護者が多く、子供とのコミュニケーションが十分にとれていない
- ・家庭教育に関して、お便り等で発信をしているが、なかなか保護者の行動に結びつかない
- ・子供の発達について悩んでいる保護者がいる

これらの保護者の実態から、a 保育園の願いは「親子のコミュニケーションの具体例を伝えてほしい」「このコミュニケーション方法ならできる！と思わせてほしい」「子供の発達に関する保護者の悩みを聞いて欲しい」の三つであった。



【資料9 a 保育園との打合せの様子】

a 保育園からの願いを受け、派遣対応者と社会教育主事から次の四つの支援内容を提案した。

- ・親子のやりとりを実感できる演習（資料10）
- ・わらべ歌での手遊び
- ・保護者向けの絵本の読み聞かせ
- ・保護者と一緒に子育て座談会



紐を引き合う強さで、親子のやり取りの感覚が分かるんです

【資料10 演習の説明の様子】

これらの大まかな内容を保育園担当者に説明することで、互いに支援内容を理解し合うことができた。

【考察】

打合せ後に構成員から「支援活動に協力でき嬉しい反面、不安もある」という言葉を聞いた。このことから、支援活動のイメージをもつ評価が低かった理由として、大まかな活動はイメージできたが、活動展開等に不安が残ったからだと考える。



【資料11 打合せ後の構成員のアンケート結果】

イ a 保育園の保護者を対象とした学習会の実施

【手順2】・・・派遣対応者と支援活動の90分の時間配分を考えたり、親子のコミュニケーションの大切さを伝える内容・演習を精選したりして、支援内容の具体化を図り、派遣対応者が不安なく支援活動ができるようにする。

派遣対応者との活動内容の打合せでは、次の四点に重点を置き、打合せを行った（資料12）。

- ・活動全体（90分）の時間配分
- ・派遣対応者の役割分担
- ・演習内容の検討
- ・保護者と一緒に座談会の展開の仕方

特に、初めて派遣活動に参加する構成員（児童施設職員）は、a 保育園との打合せ後に不安が残っていたので、自分の子育ての話で何を話すといいのか、保護者からの相談が出ない場合はどうするのかなど、30分間を想定しながら支援内容の具体化を図った。自分の子育てに関する話の部分では、以前の定例会にて児童施設職員の子育てで大変だったことや後悔をして

◆ 60分間 ◆	 音楽療法士
<ul style="list-style-type: none"> ・親子のやり取りを実感できる紐を使った演習 ・「みかんの花咲く丘」「ずいずいずっころばし」を歌いながらの手遊び ・親子のコミュニケーションで大事にしたいこと ・「おかあちゃん」「ひとつだけ」の読み聞かせ 	
◆ 30分間 ◆	 児童施設職員
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の子育ての話 ・保護者からの相談・感想 	

【資料12 a 保育園での支援活動計画】

いることなどを伺っていた。そこで、「保護者からも相談が出やすいように、自分の失敗談から話すとよいのでは…」と助言をし、その後どんな内容の失敗談がいいのかを検討した。また、派遣対応者の二人には、「今の保護者の姿も認めてあげたい」という気持ちがあったので、その思いを今回の支援活動のベースに置くことを確認し合い、保護者の気持ちに寄り添いながら支援活動を展開するようにした。

支援活動当日は、支援計画通りに親子のやり取りを実感できる演習からスタートした。初めは表情の硬かった保護者も、近くの人と紐を使っのやり取りを体験することで、楽しそうな声もあがり、和やかな雰囲気で開催することができた（資料 13）。後半の子育て座談会では、なかなか意見が出ずに、指名した保護者に感想等話をしてもらう形になったが、今までの自分の子育て、子供との関わりを振り返り、涙を流しながら感想を述べてくれた保護者もいた。その保護者の子育ても「全力で子供と向き合っている証拠です」と構成員が受け入れながら、これからの子供との関わり方について話し、保護者学習会をまとめることができていた。



【資料 13 保護者学習会の様子】

【考察】

学習会後の保護者アンケートの結果、ほとんどの保護者が「今後の参考になった」と回答していた。また、学習会後に構成員が保護者の相談にのっていた姿も見られた。このことから、「依頼内容に応えることができた」の評価が高くなったと考える。



【資料 14 支援活動後の構成員のアンケート結果】

ウ a 保育園の保護者を対象とした学習会の振り返り（研究の構想：視点3）

【手順 3】・・・支援活動中の保護者の様子を伝えたり、保護者のアンケート結果を（もの・ことをつなぐ）伝えたりしながら振り返りを行い、次回に生かせる支援内容や方法の助言を行い、今後の活動に意欲をもつことができるようにする。

園長先生から「絵本の読み聞かせに感動し、涙がでた。また、保護者の悩みや感想を直接聞くことができよ学習会になった。」との感想をいただいた。社会教育主事からは、構成員の話にうなずきながら聞いている保護者が多くいたことを伝え、それは、保護者の気持ちに寄り添いながら支援活動が展開されていたからだと価値付けを行った。構成員からは、「最終的に時間がオーバーしてしまったことや省略した内容があった」との反省が出されたので、「話をしていると、あれもこれも伝えたくになりますよね」と認めつつも、「伝えたいことを整理し、今後一緒に計画の修正を行いましょう」という助言を行った。

【考察】

保護者のアンケートを見ながら、安心した表情を浮かべる反面、「次は～をしてみたい」や「もっと～の時間を多くとればよかった」など、自分たちの活動を振り返る姿が見られた。これらの姿が、「課題を克服したい」つまり、次回の支援活動への意欲が高まった理由だと考える。



【資料 15 支援活動後の構成員のアンケート結果】

⑥ 実践1についての考察

○ 家庭教育を支援するネットワークの構築を図る工夫の点から（研究の構想：視点1）

資料16の結果から、構成員のスキルを把握し、最適な人選をすることができたと考える。

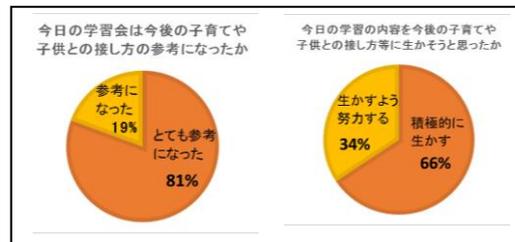
また、構成員からは「～さんと一緒だったので安心して活動できた」との振り返りもあり、講話経験のある構成員と講話経験の少ない構成員を組み合わせたコーディネーターの工夫は、支援活動を展開する上で有効だったと考える



【資料16 支援活動後の構成員のアンケート結果】

○ 家庭教育を支援する構成員のスキルアップを促す工夫の点から（研究の構想：視点2）

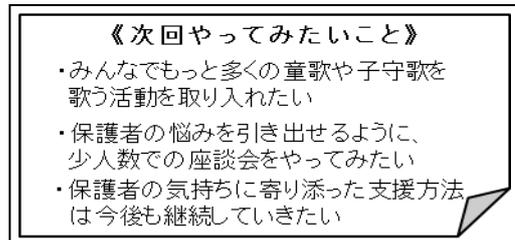
資料17の結果から、構成員の講話の組み立てや話し方を工夫することで保護者に支援内容がうまく伝わっていることが分かる。また、保護者学習会時に、定例会で他の構成員から学んだ演習も取り入れていたことから、定例会での学習会の実施は、支援活動を展開する上で有効だったと考える。



【資料17 支援活動後の保護者のアンケート結果】

○ 家庭教育を支援する活動を継続的な活動へとつなぐ振り返りの工夫の点から（研究の構想：視点3）

資料18に示すように、派遣対応者の二人から次回につながる積極的な意見が出された。これは、よかった点→問題だった点の順に振り返ることや助言ポイントを示した振り返りのシートの活用が有効だったと考える。



【資料18 振り返りシートの一部】

(2) 実践2

b 地区親子家庭教育講座への派遣活動（B地域の家庭教育支援チーム）

① B地域の家庭教育支援チームの構成員について

B地域は、乳幼児期の保護者支援、高齢者の学び場やボランティア活動の仕組みが整っており、地域の人材を生かした地域活動が展開されている。しかし、保育園、幼稚園、小・中学校の家庭教育支援については、今から支援を実施としているところである。そこで、B地域では、乳幼児期の保護者支援や、ボランティア活動を積極的に行っている方や子供の一時預かりボランティアでチームを構成した。以下に示しているのは、B地域の家庭教育支援チームの構成員である。

- ・読書ボランティア
- ・栄養管理士
- ・元調理師
- ・元保健師
- ・言語聴覚士
- ・地域ボランティア
- ・子供の一時預かりボランティアグループ
- ・コーディネーター（B村家庭教育担当者）

② B地域の家庭教育支援チームの定例会での支援内容の検討について（研究の構想：視点2）

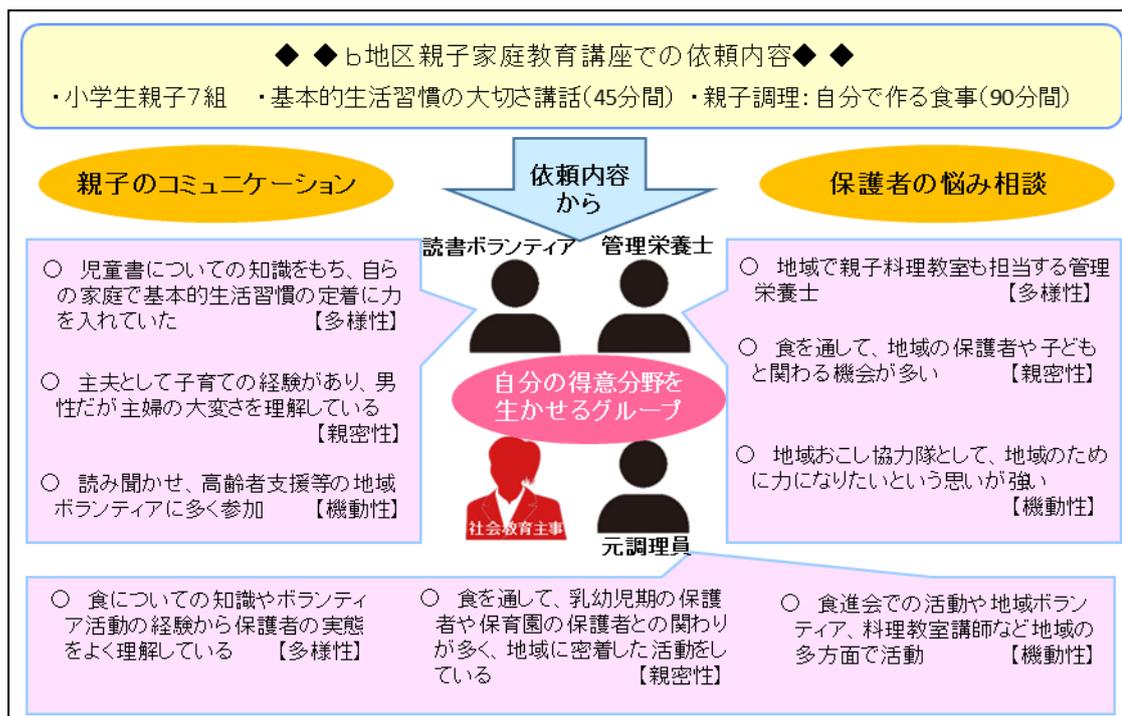
B地域の家庭教育支援チームは、1か月に1回程度定例会を実施し、自分たちが地域でできる支援を考えたり、地域の保護者の声を直接聞いたりする場を設けている。また、家庭教育に関係する専門的知識をもつ構成員がほとんどいないため、社会教育主事が作成した資料をもとに、意見交流をしたり、構成員が派遣される支援内容を一緒に考えたりして、派遣活動の支援内容をチームで検討している（資料19）。



【資料19 定例会で派遣内容の具体化を図る様子】

③ 構成員の選定について（研究の構想：視点1）

b地区からの依頼書をもとに、B地域の家庭教育支援チームコーディネーターと相談し、依頼内容から派遣対応者の人選を行った。相談の結果、Bチームにとって初めてのは派遣活動ということもあり、基本的生活習慣の講話を読書ボランティア、親子調理の担当を栄養管理士、元調理士の計3名に依頼し、社会教育主事も読書ボランティアと一緒に講話を担当することにした（資料20）。



【資料20 b地区親子家庭教育講座への派遣対応者の人選】

④ 実践2の社会教育主事のコーディネート立場について

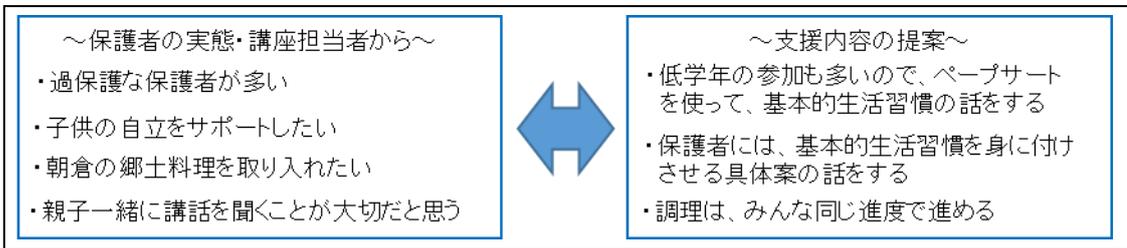
自主的・自発的な活動になるよう、手順1→手順2→手順3に沿ってコーディネートを行っていくが、今回の派遣対応者の実態（B地域家庭教育支援チームの初めての支援活動）から、手順2、手順3に重点を置きコーディネート活動を行う。

⑤ 実践2のコーディネート活動の実際について

ア b地区親子家庭教育講座の計画

【手順1】・・・派遣対応者とともに打合せに参加し、講座担当者から講座の概要、(ひと・ものをつなぐ) 願いを聞き、チームでの事前の打合せをもとに支援内容の提案を行い、当日の支援活動のイメージをもつことができるようにする。

実践1において、打合せ後に派遣対応者に不安が残ったことを改善するために、B地域の家庭教育支援チーム定例会にて、本講座の支援内容の大まかな具体化を事前に話し合い、打合せに臨んだ。その結果、依頼内容の提案はスムーズに行うことができ、残った時間で調理室の見学や調理器具の確認、親子調理に使う材料等について細かく打合せをすることができた。打合せで確認したb地区の保護者の実態や願い、提案した支援内容は以下の資料21の通りである。



【資料21 b親子家庭教育講座での打合せの内容】

【考察】

打合せの時に、調理担当から最終的な人数決定や団子汁に入れる材料等の話も出ていた。このことから、打合せ前に依頼内容の大まかな具体化を図っていたことが、全体のイメージをもつことにつながったと考える。

項目	結果
イメージをもつことができた	3.7

【資料22 打合せ後の構成員のアンケート結果】

イ b地区親子家庭教育講座の実施

【手順2】・・・講話担当派遣対応者と45分間の役割分担や活動内容を考えたり、(ひと・ことをつなぐ) 調理担当者と調理の進行の仕方や材料の準備について考えたりして、支援内容の具体化を図り、派遣対応者が不安なく支援活動ができるようにする。

派遣対応者との支援内容の打合せでは、次の三点に重点を置き、打合せを行った(資料23)。

- ・講座全体の流れ(始まりから終了まで)
- ・当日の役割分担(調理時のサポートも含む)
- ・講話内容の検討

今回は、講話と調理に分かれていたが、調理担当から「調理の方は、随時二人で打合せをしながら準備をする」とのことだったので、当日の流れと役割分担を確認した。



【資料23 b地区親子家庭教育講座の支援活動計画】

講話担当の読書ボランティアとの打合せでは、45分間の役割分担をし、社会教育主事が間違いさがして話す内容や基本的な生活習慣の基本編で話すことを確認した。また、読書ボランティアは自分の子育てで大事にしたことをもとに話すとのことだったので、実践の結果、今お子さまがどのような様子なのかや、親子家庭教育講座には低学年の子供も参加するので、基本的な生活習慣に関する絵本の読み聞かせも入れてみてはどうかと助言を行った。

調理担当とは、準備等の負担が大きくならないように、積極的に連絡を取り合い、b地区の担当者との連絡調整を行った。

支援活動当日は、b地区の講座担当者の協力も得ながら講話を進めた。ペープサートを使った基本的な生活習慣のまちがい探しでは、子供たちの生活にも当てはまるが多かったようで、「これ、あなたも当てはまるよね」と保護者から声を掛けられ、にこっとする子供の様子も見られ、和やかな雰囲気の中で活動を展開することができた(資料24)。

読書ボランティアによる、実践編の講話では、「早寝・早起き・朝ごはん」の早起きのポイントを「子供の好きなことは朝させる」とし、自分の家庭で実践したことを話した。また、絵本の読み聞かせも取り入れ、「朝は素敵なことがたくさんある」という内容を絵本の読み聞かせから伝えることができた(資料24)。

親子調理では、事前の計画通り、栄養管理士が全体を進行し、元調理士が進行のサポート、講話担当がグループの補助を行った。調理の前に、「できるだけ子供たちに作業をさせてほしい」と全体で確認をしていたので、子供たちが積極的に活動することができた。その積極的な子供の姿に、家庭での子供との関わりを見直す保護者も多くいて、保護者にとっても子供の新たなよさを発見することができる良い機会にもなっていた(資料25)。



【資料24 親子家庭教育講座講話の様子】



【資料25 親子家庭教育講座調理の様子】

【考察】

講座後の保護者アンケートから、ほとんどの保護者が「今日の学びを今後生かしたい」と回答していた。また、保護者の構成員の話にうなずきながら聞く姿や調理で質問する姿などから、納得のいく支援活動ができたと考えられる。



【資料26 支援活動後の構成員のアンケート結果】

ウ b地区親子家庭教育講座の振り返り（研究の構想：視点3）

【手順3】・・・支援活動中の保護者の様子やアンケート結果を伝え、保護者の様子（もの・ことをつなぐ）や感想と支援内容をつないで価値付けを行い、構成員同士の連携のよさを称賛することで、今後の支援活動に意欲をもつことができるようにする。

まずは保護者の感想を伝え、「よかったこと」から振り返りを行った。「よかったこと」では、読書ボランティアから「絵本の読み聞かせを入れたことで、子供たちの興味を引くことができた」との振り返りがあった。そこで、社会教育主事からは、「絵本の内容が講話の内容や流れに合っていたからこそ、子供たちの反応がよかったのだと思う」と構成員の支援活動と関係付けて価値付けをした。他の二名も同様に価値付けを行った（資料27）。

<p>～管理栄養士の場合～</p>  <p>子供たちが積極的に活動することができていたことは、嬉しかった。</p>  <p>子供たちが活動できるように、手本を示したり、進度を合わせたりしながら展開されたからだと思う。</p>	<p>～元調理士の場合～</p>  <p>保護者が手をとり、子供と一緒に具材を切る姿を見ることができたのがよかった（最近あまり見なくなったので）。</p>  <p>保護者が子供と一緒に調理に集中することができたのは、事前に具材等の分配を行い、活動に集中できる環境を整えていただいたからだと思う</p>
--	--

【資料27 振り返りにおける社会教育主事の助言】

「問題だったこと」では、「調理中に走り回る子供の対応が分からなかった」や「準備等の負担が大きかった」との声があがった。そこで、今後は講話、演習中の子供の指導に対してはできる限り全員で行い、判断がつかない場合は、社会教育主事が対応するように確認をした。準備等の役割分担については、依頼施設等とも協力し合いながら負担を減らしていくようにすることを確認し、今後の支援活動に不安を残さないようにした。

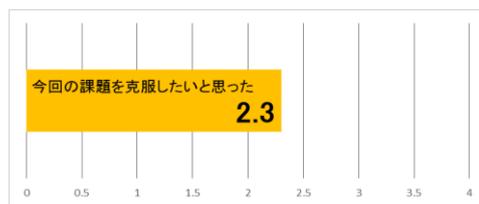


【資料28 振り返りの根拠となる活動の様子】

「次回やってみたいこと」では、「今回のような親子クッキング講座を企画してみたい」や「親子と一緒に活動する機会をつくりたい」という声があがった。このことから、子供の一生懸命な姿や親の新たな気付きができる親子活動の素晴らしさを、チームの他の構成員にも伝えてほしいことをまとめとした。

【考察】

資料29の結果が低かった理由として考えられるのは、今回の課題が個人の課題というよりも、チームとしての対応や依頼施設とのやり取りで改善すべきことが多かったからだと思える。今後はチーム内だけではなく、依頼施設とのより丁寧な調整も必要であると思える。



【資料29 支援活動後の構成員のアンケート結果】

⑥ 実践2についての考察

○ 家庭教育を支援するネットワークの構築を図る工夫の点から（研究の構想：視点1）

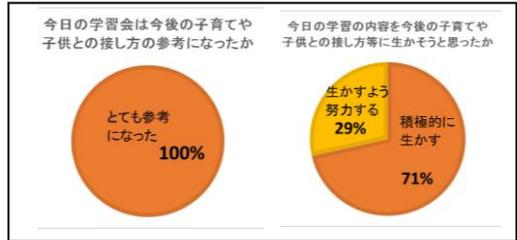
資料30の結果から、構成員のスキルを把握し、最適な人選をすることができたと考える。また、講話経験の少ない構成員に対して、社会教育主事が講話のモデルを示したことも情報を提供するという点で有効だったと考える。



【資料30 支援活動後の構成員のアンケート結果】

○ 家庭教育を支援する構成員のスキルアップを促す工夫の点から（研究の構想：視点2）

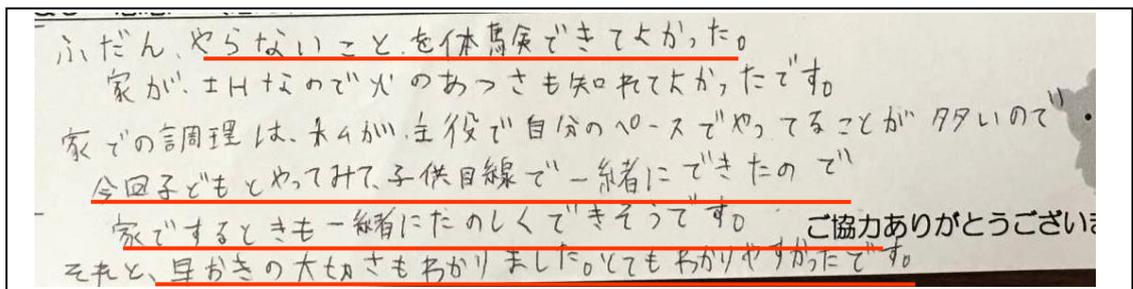
資料31の結果から、支援内容が保護者によく伝わっていることが分かる。このことから、チームで支援内容を検討したことで多様な支援方法の可能性を見いだすことができ、このことが派遣対応者の自信と可能性を広げる上でも有効だったと考える。



【資料31 支援活動後の構成員のアンケート結果】

○ 家庭教育を支援する活動を継続的な活動へとつなぐ振り返りの工夫の点から（研究の構想：視点2）

振り返りのシートの手順（よかったこと→問題だったこと→次回やってみたいこと）に沿って支援活動の振り返りをする中で、「自分たちで親子活動を企画してみたい」というプラスの意見を引き出すことができた。また、保護者の感想をすぐに伝えることで、構成員が今回の支援活動の価値を実感でき、今後の支援活動への意欲へとつなげることができたと考える（資料32）。以上のことから、振り返りシートの活用と社会教育主事の助言は有効であったと考える。



【資料32 親子家庭教育講座の参加者の感想】

(3) 実践3

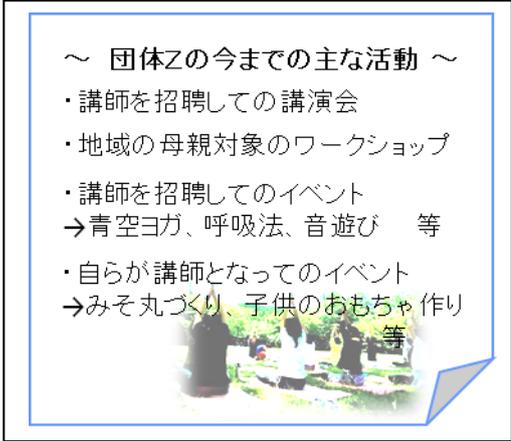
c 地区母親サークル（テーマ：食育）への派遣活動（C地域の家庭教育支援チーム）

① 実践3の社会教育主事のコーディネートの立場について

実践1、実践2を通して、家庭教育支援チームの自主的・自発的な活動の計画、実施、振り返りの段階において、社会教育主事によるコーディネート活動（手順1、手順2、手順3）が有効であることを明らかにすることができた。そこで、社会教育主事のコーディネートの可能性を見いだすために実践3において検証を行う。

C地域の家庭教育支援チームには、母親団体Zが所属をしている（以下「団体Z」という）。団体Zは、家庭教育支援チームに所属する前から、母親がいつも笑って楽しく過ごせる活動を企画し、実施をしている（資料33）。つまり、自主的・自発的な活動を身近な地域で展開しているのである。

そこで、実践3では、団体Zの支援活動をさらに地域に広げるという立場（組織化の強化）で、振り返りの段階の手順3に重点を置きコーディネートを行う。



【資料33 団体Zの主な活動歴】

② 実践3のコーディネート活動の実際について

ア ◦地区母親サークル食育学習会の概要（手順1、手順2を含む）

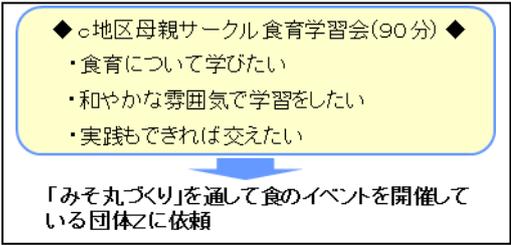
母親サークルからの依頼を受け、団体Zに支援活動を依頼した（資料34）。

母親サークルと団体Zとの打合せ時に、母親サークルの担当者が「みそ丸」に興味を示したので、「みそ丸」を作りながら食に関しての参加者交流を行うようにした。

団体Zとの打合せでは、参加者の交流の仕方に重点を置いて打合せをした。参加者交流の内容は以下の通りである。

- ・自己紹介→今回の学習会に参加した理由等
- ・実践中→食に関する悩み相談
- ・終了後→一緒に食事をしながら学習会の感想

支援活動日は、「みそ丸」に関心をもつ参加者が多く集まり、団体Zの支援活動に関しても興味を示す参加者が多かった。また、社会教育主事も一緒に活動に参加し、保護者の悩みを聞いたり、家庭教育支援チーム派遣事業の内容を説明したりしながら活動した。活動中の会話では、家庭教育支援チーム派遣事業を活用して、参加者の地区でもこの「みそ丸づくり」を通じた食育学習会を行うことが決定したり、参加者の一人が次回の母親サークルに講師として参加することが決定したりと、母親同士のつながりを広げる食育学習会となった（資料35）。



【資料34 母親サークルからの依頼内容】



【資料35 食育学習会の様子】

ウ c 地区母親サークル食育学習会の振り返り（研究の構想：視点3）

【手順3】・・・参加者のアンケート結果を伝え、支援活動の価値を実感させるとともに、参加者の活動の様子や反応から運営の仕方や参加者との関わり方について助言することで、自らの支援活動の広がりや意欲をもつことができるようにする。

まずは、多くの参加者から「みそ丸を自分でも作ってみたい」や「味噌汁の効果が分かった」「参加してよかった」という感想を書かれていることを伝え、今回の食育学習会が好評であったことを伝えた。

そして、今回の支援活動の「よかったこと」に関して、団体Zからは、「初めて会う参加者がほとんどだったが、子育てに関していつもとは違うメンバーで交流できたこと」や「いつもとは違う雰囲気新鮮だった」という声を聞くことができた。また、参加者の学ぼうとする意識の高さにも驚きを隠せない様子であった（資料36）が、「自分たちももっと頑張ろう」とよい刺激を受けられていた。この感想に関して、支援内容との価値付けは資料37に示す。

「問題だったこと」に関しては、「特になかった」とのことだったので、みそ丸の具材等の準備について社会教育主事から「自分たちでみそ丸の学習会をしたい！」という声が上がっている。主な具材や生味噌と出汁の割合等をまとめてもらおうと、参加者が喜ばれるのではないだろうか」とお願いをすると、納得をしていただき、時間があるときにまとめてみるとのことだった。

最後に、「今回参加者同士につながりが見られたのは、食に関する悩みや子育てに関する不安などを自ら参加者に投げかけ、参加者同士が話しやすい雰囲気を創り出していたことが大きな要因だと思う」と団体Zの運営や関わりを称賛し、まとめとした。

今回の支援活動は、子育てに役立つこと、母親が笑顔に元気になれるものを、母親が自分たちの力で活動をつなげようとする、つまり自主的・自発的活動のきっかけをつくる学習会となった



【資料36 実践を撮影し学ぶ様子】

～団体Zからの感想～

いつもとは違う雰囲気で活動できて、新鮮だった。交流もうまくいってよかった。

参加者の方が、楽しみながら活動してくれていたのが、嬉しかった。

交流はでは、話すだけではなく、参加者に尋ねたり、会話をつないだりしたことで、盛り上がったのだと思う。団体Zの細やかな準備のおかげで、楽しめていたのだと思う。

社会教育主事

【資料37 感想と支援内容の価値付け】

【考察】

資料37は、活動後の団体Zの感想である。今後の自らの支援活動だけではなく、支援チーム派遣活動にも意欲をもつことができた。活動を通して参加者をつなぐことで、さらなる支援活動の広がりが期待できると考える。

自分たちでの計画ではなく、依頼内容に応じる形は初めてだったが、自分たちの活動の刺激にもなり、今後も続けていきたい。保護者との新たな出会いもあり、ありがたい。

【資料38 支援活動後の団体Zの感想】

③ 実践3についての考察

○ 家庭教育を支援する活動を継続的な活動へとつなぐ振り返りの工夫の点から（研究の構想：視点3）

「支援活動を広げる」という視点から助言を行ったことで、団体Zも自分たちの活動により自信がもつことができたと考える。また、今回の活動を機に、団体Zが企画をしていた支援活動の参加者を、今までよりも広範囲にも呼びかけることを検討するとの声も聞くことができた。このことから、今後の支援活動に意欲をもつ支援活動のねらいに沿った助言は、有効だったと考える。

○ 家庭教育を支援する活動をつなぐ新たなネットワークについて

本実践にて、「支援活動を広げる」という点でコーディネートをを行った結果、参加者同士のネットワークが形成され、自分たちの地域で自主的・自発的に活動しようとする姿が見られた。このことから、今後ネットワーク構築の視点に、「参加者同士をつなぐこと」を入れることで、新たな保護者同士で支援し合うネットワークが構築され、身近な地域においての家庭教育を支援する新たな自主的・自発的な活動の展開につながっていくと考える。

7 全体考察

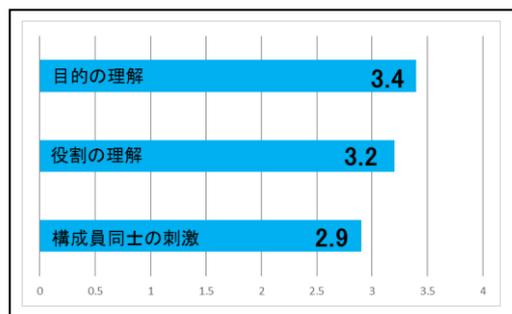
地域に密着した家庭教育を支援するための、チームの高まりと構成員の高まりを検証するために調査を行った。構成員の派遣回数が異なるため、平成30年7月までに講話、演習の講師として2度以上派遣に対応した構成員を対象にアンケート調査した結果から考察を行う。アンケートは4件法（「4：よくしている（とても思う）」「3：している（思う）」「2：あまりしていない（あまり思わない）」「1：していない（思わない）」）で回答してもらい、目標値を3とする。家庭教育支援チーム構成員へのアンケートは以下の通りである（表4）。

【表4 家庭教育支援チーム構成員へのアンケート項目】

チームとしての高まりに関する項目	構成員としての高まりに関する項目
・依頼施設の思いや願い、依頼内容を理解して支援活動を行うことができていますか。	・支援活動を行うことで、参加者の家庭教育に関する意欲が高まっていると思いますか
・二人以上の構成員で支援活動を行う際の、自分の役割を理解していますか	・支援活動を行う際に、前回の活動で課題だと思ふ点を改善しようと思いましたか
・チームで活動する際（定例会、支援活動）に他の構成員の発言や活動が自分の活動により刺激を与えていると思いますか	・支援活動を行うことで、家庭教育に関する自分のスキルが向上していると思いますか

○ チームとしての高まり

資料39の目的や役割の理解に関しては、計画、の段階において依頼施設や派遣対応者同士で打合せを行うことができていた成果だと考える。他構成員からの刺激が低い理由としては、共に活動する機会が少ないことも考えられるが、チームとしてのよさを助言したり、チームの方向性を明確に示すことができなかつたりしたことも理由の一つだと考える。



【資料39 チームの高まりに関するアンケート結果】

そこで、各地域のチームが目指す姿を定例会にて明確にしたり、派遣する構成員のペアやグループの組み合わせを変え多様な構成員と関わる機会をつくったりして、目標値の3に達することができると思う。

○ 構成員としての高まり

全ての項目において、目標値の3を上回っているのが分かる（資料40）。これは、支援内容の具体化を派遣対応者と共に考えたり、次回の支援活動につなぐことを意識して振り返りをしたりしたことが成果として表れていると考える。



【資料40 構成員の高まりに関するアンケート結果】

以上のことから、自主的、自発的な活動をサポートする社会教育主事のコーディネート活動を仕組んだことは、家庭教育を支援する派遣事業を展開する上で有効であると思う。

8 成果と課題

(1) 研究の成果

- 家庭教育に関する情報の収集、分析、提供を行い、ネットワークの構築を図ったことは、派遣活動の最適な派遣対応者を人選したり、構成員を組み合わせたりすることにつながり、自主的・自発的な活動をサポートするコーディネート活動の具体化を図る上で有効だった。
- 家庭教育支援活動を通して構成員のスキルアップを図った人材育成は、定例会での学習や支援内容の検討が派遣活動に生かせるスキルを身に付けることにつながり、自主的・自発的な活動をサポートするコーディネート活動の具体化を図る上で有効だった。
- 継続的な活動へつなぐ組織化の援助は、振り返りシートを活用することで、支援活動の内容を見つめ直すことができ、派遣対応者の支援内容を価値付けすることにもつながり、自主的・自発的な活動をサポートするコーディネート活動の具体化を図る上で有効だった。

(2) 今後の課題

- 定例会にてチームで目指す姿を明らかにし、自主的な支援活動をチームで考え実践したり、派遣対応者のペアやグループの組み合わせを変えて多様な関わりをつくったりして、チームとしての意識を高めること。→組織化の強化
- 構成員が必要とする家庭教育に関しての資料やデータの収集を行い、その資料を分類、整理し、いつでも支援活動に活用できるようにすること。→情報収集・分析・提供の強化

…………… 〈 参 考 文 献 〉 ……………

- ・中央教育審議会（2015年）「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」
- ・福岡県立社会教育総合センター（2016年）
「平成27年度幼児（3・4・5歳児）をもつ保護者の養育態度・意識の実態に関する調査」
- ・井上 昌幸（2018年）「社会教育主事の役割を考えてみよう」 社会教育6月号
- ・福岡県教育委員会（2018年）平成30年度家庭教育支援チーム設置事業実施要領